

(熊本郡西之表市現和浅川牧)

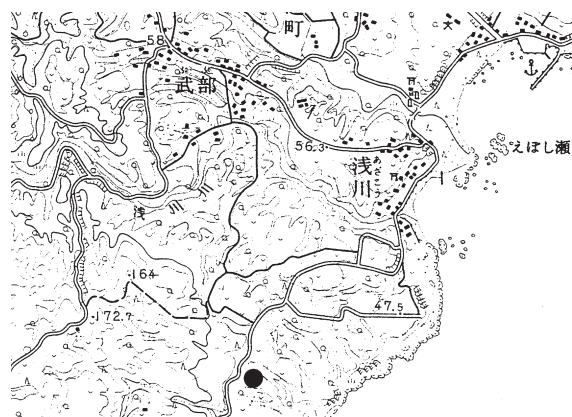
位置と環境

浅川牧遺跡は種子島の東海岸、太平洋に注ぐ現和川右岸の幾重にも延びた標高約65mの舌状丘陵台地の県道国頭安城中種子線の東側に位置する。現和地区の台地は、東側の海岸線に向かって幾重にも台地が延び、その間には狭い小谷が形成されている。

本遺跡から約2km南には縄文草創期の奥ノ仁田遺跡が位置する。

調査の経緯

遺跡は、西之表市西京地区県営ほ場整備事業に伴って、昭和54年12月～昭和55年2月にかけて西之表市教育委員会が調査主体となり、県教育委員会が調査を実施した。遺跡は北側の台地を第Ⅰ地点、南側に2つの谷を隔てた第Ⅱ地点からなる。第Ⅰ地点の浅川牧遺跡は、確認調査の結果、縄文時代後期の市来式や晩期の土器が出土し、その取り扱いについて協議し、整備事業区の約9,000㎡については、盛土工法による設計変更で現地保存を図ることとなった。



第1図 浅川牧遺跡の位置

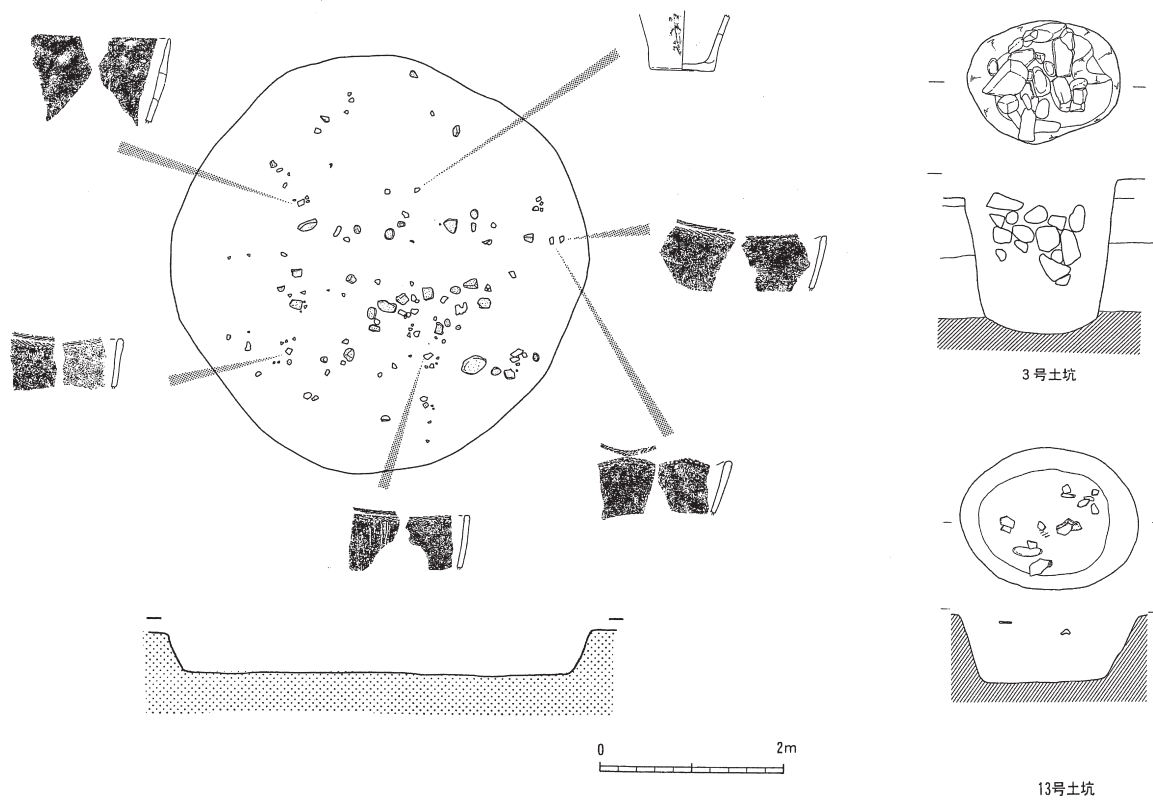
第Ⅱ地点では、5,000㎡を盛土による現地保存し、切り土部分や道路敷部分の1,600㎡は本調査を実施した。

遺構と遺物

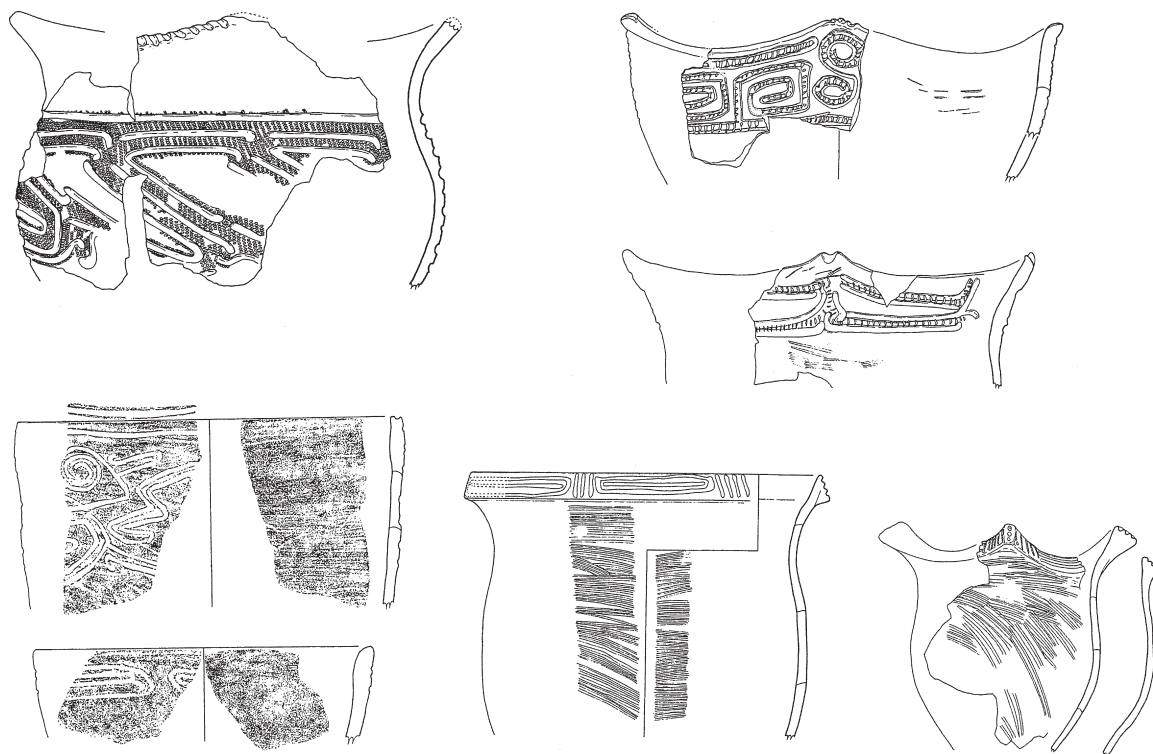
遺構には、竪穴住居跡と土坑が発見された。竪穴住居跡はD地点から発見された、直径4.5mの円形を呈し、深さは約50cmの円形竪穴住居跡である。壁の立ち上がりはやや傾斜し、床面はほぼ平坦となる。柱穴は確認できなかった。住居内からは縄文後期の一湊式土器が多数出土し、一湊式土器に伴う竪穴住



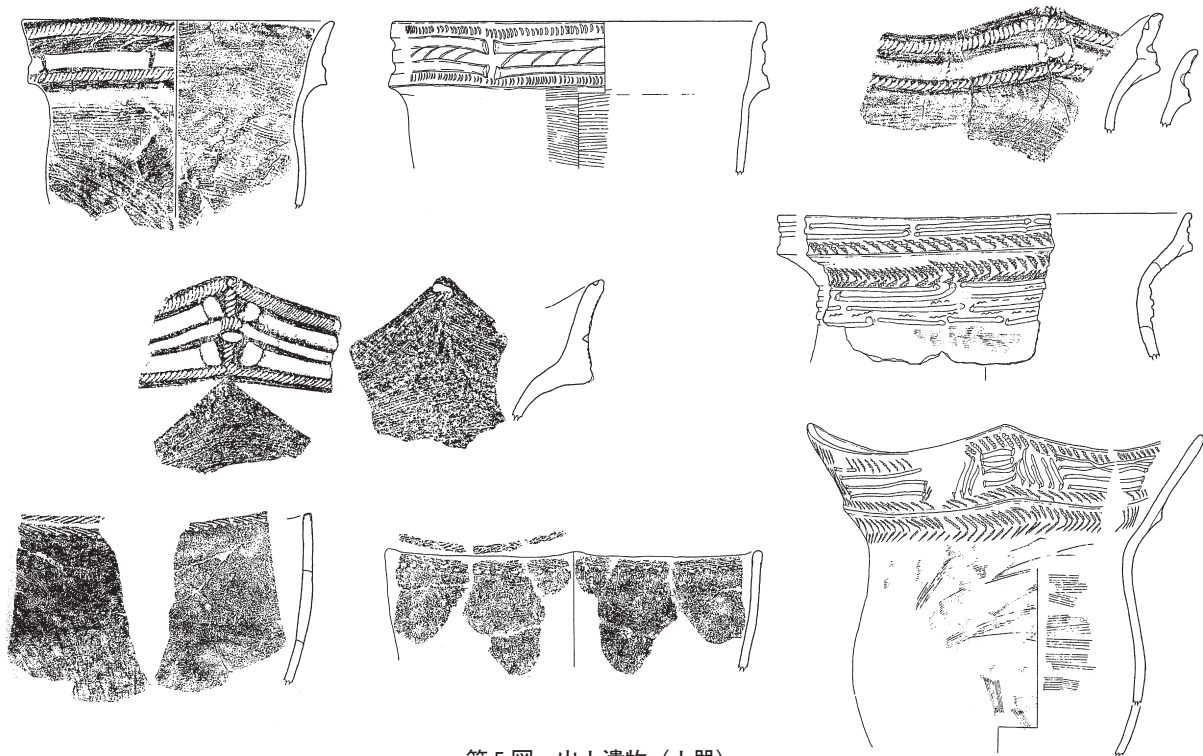
第2図 発掘調査地点



第3図 遺構・竪穴住居跡



第4図 出土遺物 (土器)



第5図 出土遺物（土器）

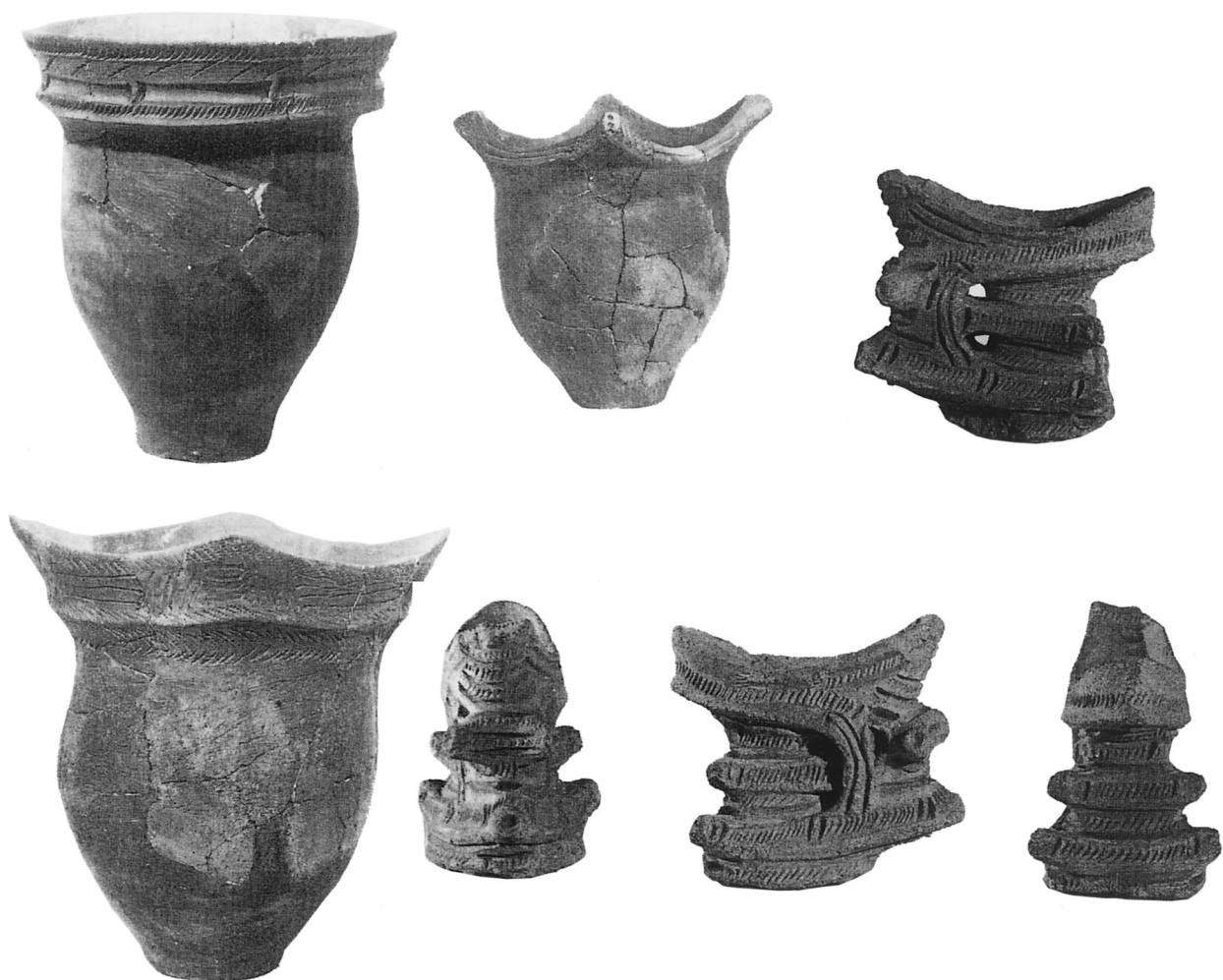
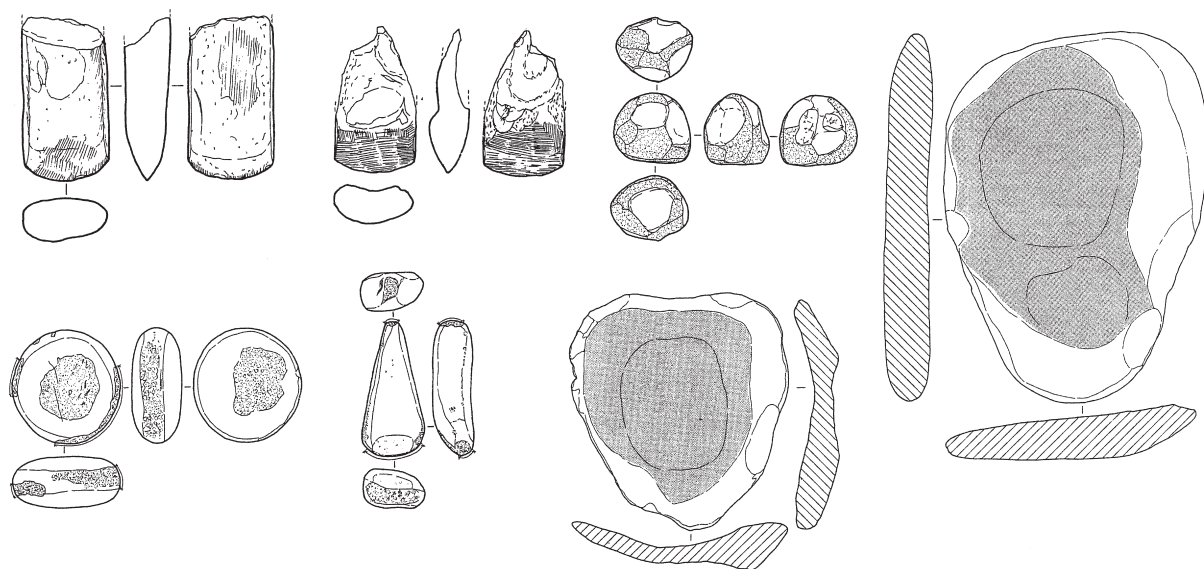


写真1 出土遺物（土器）



第6図 出土遺物（石器）

居跡としては県内で最初の発見である。なお、竪穴住居跡が位置するD地点一帯には遺跡が広がることが予想され設計変更によって当住居跡も含め、周辺は盛土で保存することとなった。

土坑は総計66基が発見された。ピット状の小型から径1m前後まで規模はさまざまで、形状は楕円形や円形を呈す。土坑内からは縄文後期の市来式、松山式、丸尾タイプの土器が出土した。

出土土器には、縄文後期中葉の磨消縄文土器・指宿式土器、本遺跡の主体を占める縄文後期中葉の松山式土器、市来式土器、草野式土器、一湊式土器がある。なお、市来式土器の中には台付皿形土器は復元口径12.8cmで口縁部は直行し、口縁部直下で稜を有し、山形口縁を呈す。体部は充実して器壁は厚い。口縁部の上下には刺突文と3本の短い沈線と中央に2個の太形押圧文、体部には篋刻線文と連点文を施す。壺形土器口縁部は中空で、上部・中部・下部とそれぞれが張出した文様帯を設け、片方の上部と下部は把手で繋ぎ、凸起を施す長頸の壺形土器型の口縁部である。上部口縁部の平面形は直径約10.7cm、短径約4cmの楕円形を呈す。両端は弓なりにせり上がり山形口縁部となる。内側断面は下部で広がり、中部で窄まり、上部の口縁部でラッパ状に外反する。頸部は直径約5.4cmの円形である。現存する高さは9cmである。文様は沈線文、爪形文、キザミ目文、

押圧文など市来式土器の文様構成と同一である。

石器には大半が砂岩を使用し、磨製石斧(定角式及び乳棒状の2種類)、磨石・敲石類(磨石・凹石・ハンマーストーン)、石皿(石皿は大量に出土)、軽石製品等が出土した。

特徴

本遺跡の特徴は、縄文時代後期中葉の市来式土器を主体とする土器や磨石・石皿が大量に出土したこと、また、66基におよぶ土坑の存在、壺形土器(この種の土器は西之表市納曽遺跡、中種子町鷹取遺跡、指宿市大渡遺跡からの出土例があるが、器形や基器種については不明であった)の発見などがあげられ、また、一湊式に伴う円形竪穴住居跡は本県で最初の発見で、縄文後期の生活跡を知る貴重な遺跡であった。

資料の所在

出土遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターに保管されている。

参考文献

鹿児島県立埋蔵文化財センター 1994「浅川牧(I・II)遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』10

(青崎和憲)